

超国籍企業の 公共性と私的所有

クレジット

「シリコンバレー その知られざる顔」,
(Capa Presse : 2014年) より

注目点

- ➡ 超国籍企業と個人との対立を主として地域コミュニティとの対立として描いている。
- ➡ 超国籍企業における私的所有と社会的労働との対立を私的企業による公共性の包摂、および私的企業への公共サービスの奉仕として描いている。

場所

- シリコンバレー (Silicon Valley)
 - アメリカ西海岸のカリフォルニア州のサンフランシスコ湾周辺地帯にある。
 - シリコン=半導体素材である珪素のこと。ここで半導体産業が起ち上がったから。

補足として(1)

- 超国籍企業は、一日三食会社で食うような働き過ぎの知識労働者を働かせている。彼らの高給や高い社会的地位にもかかわらず、超国籍企業は彼らから十分な利益を搾取している。
- 問題を金持ちと貧乏人との対立だけに単純化してはならない。
- 資本（すなわちわれわれ個人がつくりあげた社会的なシステム）と個人との対立を見なければならない。

補足として(2)

- カリフォルニア州は、そしてIT産業は、反トランプ、反移民規制、民主党支持が強いが、そこに人権の尊重とかりべルなんちゃらとか美しい理念だけを見てはならない。そのような政策から十分に得られる経済的利益もある。
- トランプ旋風を支えた要因の一つは貧富の格差であり、超国籍企業に対するルサンチマン（恨み辛み）である。